様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８３００７

研究課題名（和文）インドネシアの災害後社会における生活再建と女性

研究課題名（英文）Women in post-disaster society in Indonesia

研究代表者
西　芳実（Nishi, Yoshimi）

京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授

研究者番号：３０４３１７７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：2004年スマトラ沖地震・津波の救援・復興過程に関する研究の蓄積をもとに、現地聞き取り調査、現地語文献調査、ならびに証言集データベースを活用した分析の組み合わせにより、インドネシアの災害後社会の生活再建において女性が積極的な役割を果たしている事例を抽出し、その特徴や傾向を分析した。その成果は、国際学術会議、一般公開セミナー、専門書の分担執筆等を通じて公開した。また、研究成果の現地還元の一環として、分析の過程で制作された証言集データベースを用いて、現地で防災教材作成実習を行った。

研究成果の概要（英文）：This research extracts and analyzes cases in which women play an active role in rebuilding the lives of post-disaster society in Indonesia, based on the accumulation of researches on the relief and reconstruction process of the 2004 Sumatra Earthquake and Tsunami, by combining field survey, local literature survey, and database-analyzing of survivors' testimonies. The outcomes of this research were published through international scientific conference, public seminar, and book chapters. The database of survivors' testimonies, a byproduct of this research, has been shared as teaching materials by local university.

研究分野：インドネシア地域研究

キーワード：災害対応　証言　スマトラ　アチェ　地域情報学　防災　津波

１．研究開始当初の背景

災害などの被害に対して強くしなやかな社会を作るためには、被害の規模が大きくなって取り返しのつかない大きな損失を受ける前に、少しずつ対応する日常的な活動が重要となる。ただし、そのような活動は、多くの場合、それが災害への対応であることが意識されず、日常生活の一部として実施されることによって社会のレジリエンスを支えているため、その活動が営まれている日常生活において、その機能を認識したり、他の地域で参照可能な形で示したりすることは困難である。これらの活動が災害対応として機能していることは、実際に災害が発生した地域においてそれらの活動がどのような役割を果たしたかを見ることによって初めて明らかになる。

日常生活に織り込まれた災害対応の活動においては、女性が重要な役割を担う。女性は、災害対応において、しばしば子どもや高齢者や障害者と並び、災害による被害を受けやすく、特別な保護や啓蒙を必要とする存在であるという観点から捉えられてきた。この考え方は、災害復興がしばしば社会的インフラの物理的再建や地域経済基盤の再生を重視するのに対し、弱者の立場や視点に注意を向けさせるという意義があるが、その一方で、この考え方は、現実にコミュニティレベルで女性が災害後社会における生活再建や地域復興の主体となり、社会の脆弱性を克服するのに貢献している側面や、平常時の日々の活動によって社会の「ほころび」を繕い、そのことが社会のレジリエンスを強めていることを適切に評価していない。

２．研究の目的

本研究は、災害後社会の生活再建において女性がどのような課題に直面し、それをどのように克服してきたかを検討することを通じて、女性を社会の「脆弱性」と捉えるのではなく、むしろ社会の脆弱性を克服し、社会のレジリエンスを高めて災害や紛争に強い社会の再建に積極的な役割を担っている側面を明らかにする。そのため、2004 年インド洋津波の救援・復興過程に関する研究の蓄積をもとに、現地調査により日常生活に組み込まれた災害対応の実践の抽出を試みる。

３．研究の方法

過去 10 年以内に大規模自然災害に見舞われ、今後も大規模自然災害が発生する危険性が指摘されているアチェ州とジョグジャカルタ州を主要な研究対象地域として、(1)文献調査と研究基礎資料の作成、(2)災害地域情報マッピングシステムを活用したサーベイ、(3)専門家との意見交換、(4)女性による災害対応の日常実践に関する臨地調査という 4 つの活動を順次進展させた。

災害後社会の生活再建における諸課題を抽出する過程で、①被災体験の語り直しが特に近親者の弔いをめぐって頻繁に行われていること、②過去の異なる災害や紛争への言及が重ねて行われていることが特徴として抽出されたため、二年目以降は、自然災害に限定せず、紛争や内戦を含めて広く「災厄の体験」の語り直しに注目して、対象をアチェとジョグジャカルタに限定せず、インドネシア全国レベルの災厄体験を含めて、資料収集と分析を行った。その際に、アチェについてはアチェ州公文書館が編纂した『津波と彼らの物語』を、全国レベルの災厄体験については映像資料の活用を積極的に行った。また、比較の対象として東ティモールを追加した。

４．研究成果

アチェ州公文書館が編纂した『津波と彼らの物語』に収録されている証言 111 件について、全文を日本語に翻訳したうえで、各証言を被災場所もしくは被災時の居住地をもとに地図上に表現する仕組みを作成した。

個人やコミュニティレベルで行われている女性を中心とする災厄の語り直しとその意義について、雑誌論文①、②、学会発表②、⑤、図書④に、個人やコミュニティレベルで行われている災厄の語り直しが全国レベルの災厄の語り直しの接合について雑誌論文④に、災厄の語り直しが地域や時代を越えて行われることの意味について図書③に示した。

また、日本、インドネシア、フィリピン、マレーシアの四か国による災害対応研究に関する国際学術会議に参加し、社会のレジリエンスを強める要素を検討するうえで、被災体験の共有・継承・語り直しに注目することの重要性とその手法について紹介する研究報告を行い、国際共同研究のネットワークづくりを行った。

(1)平成 26 年度

アチェ州公文書館が編纂した『津波と彼らの物語』に収録されている津波災害生存者の証言 111 件について、証言内容をテキストデータ化したうえで、性別・年齢・職業・被災場所もしくは被災時の居住地をもとに分類した作業用のデータベースを作成した。このうち、バンダアチェ市の証言 48 件について日本語への翻訳を行った。これらの証言データベースの作成過程で得られた知見をもとに、西が論文②を執筆した。

シネアドボ・ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」を実施し、インドネシアの女性映像制作者が制作・監督した作品 2 点（バリ島爆弾テロ事件を描いた『天国への長き道』ならびに津波被災後のアチェにおける爆弾漁業を描いた『海辺の先の物語』）に日本語字幕を付して上映したうえで、家族を失う痛みや津波被災地の復興に亀裂を入れる太平洋戦争の不発弾問題に対する社会の対応について検討した。また、東ティモール

で女性映像制作者によって制作された『ベアトリスの戦争』に日本語字幕をつけて上映会を行い、女性の視点からインドネシアとの戦争とその後の生活再建について検討した。

西と亀山がそれぞれバンダアチェで開催された国際学術会議で報告を行った（学術会議①②）。また、亀山は東ティモールの紛争後社会の再建について主として女性の証言に依拠して検討した論文①を公刊した。

(2)平成 27 年度

2004 年スマトラ島沖地震・津波の被災者証言データベースの整備、国際学術会議の企画・実施を行った。また、本研究の成果を踏まえて、社会のレジリエンスを歴史的かつ地域横断的に比較・検討する研究書を刊行した（図書③）。

『津波と彼らの物語』に収録されている津波生存者の証言 111 件について、各証言を被災場所もしくは被災時の居住地をもとに地図上に表現する仕組みを作成した。また、バンダアチェ市以外の証言 63 件の日本語への翻訳を行った。

シネアドボ・ワークショップ「変身するインドネシア―力と技と夢の女戦士たち」を実施し、インドネシアの女性映像制作者が制作した映像作品をもとに、現代インドネシアにおいて、混乱した社会秩序の再建や不公正・不正義状況の克服という課題に対して女性にどのような役割が期待されているかを検討した。このワークショップでの議論を踏まえて、CIAS Discussion Paper Series『混成アジア映画研究』で特集「たたかうヒロイン」を企画し、フィリピンの事例との比較を行った。

スマトラとジャワで現地調査を行うとともに、国際学術会議「International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia」に企画段階から参加し、西と亀山がそれぞれ口頭発表を行った（学会発表③④）ほか、フィリピン、マレーシア、インドネシアで災害対応研究を行う女性研究者とのネットワークづくりを進めた。

(3)平成 28 年度

『津波と彼らの物語』に収録されている津波災害生存者の証言 111 件について、証言内に出現する地名の抽出を行った。

スマトラとジャワで現地調査を行うとともに、国際学術会議「International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia」に企画段階から参加し、西が口頭発表を行った（学会発表④）ほか、日本、フィリピン、マレーシア、インドネシアで災害対応研究を行う女性研究者とのネットワークづくりを進めた。

東南アジア学会創立 50 周年記念シンポジウムで、西が口頭発表を行い、人文社会系における災害対応研究の先行研究の整理を行うとともに、独立戦争や内戦などを経て建国された国々の地域研究や歴史研究に災害復興研究の枠組みや生活再建の視点を導入することの意義を示した（学会発表⑦）。

2016 年 12 月にインドネシア・アチェ州で発生したピディジャヤ地震の被災地調査を行った。

(4)平成 29 年度

最終年度にあたる平成 29 年度は、研究成果を現地社会に還元する活動の一環として、昨年度まで整備してきた 2004 年スマトラ島沖地震・津波の被災者証言データベースとその分析結果を用いて、最大の被災地となった国であるインドネシアで証言データを活用した防災教材作成実習を行った。実習にさきだち、インドネシアの個別の被災地が大規模な災害と災害のあいだの長い災間期に入りつつあることを踏まえて、日本社会の災害観の変遷についてインドネシア語による公開セミナーを実施した。

東南アジアに人文社会系の防災研究・実践のネットワーク形成を目的に開催される国際学術会議で、日常生活に組み込まれた災害対応実践の例として、2004 年スマトラ沖地震津波の被災地で過去の災害の語り直しが行われていることや、民間伝承と強い親和性を持つ被災体験が語られていることに注目する重要性と意義を指摘する研究報告を行った（学会発表⑨）。

インドネシアの首都ジャカルタで日刊紙やテレビ番組、映画などのマスメディアを通じて災害は紛争が日常的にどのように語られているか、また、災害が比喩としてどのように用いられているかを調査した。これらの調査を通じて、個別の経験としてある被災体験が全国レベルのメディアでどのように受容され、語られているかについて考察した論文を執筆した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>亀山恵理子</u>「『小さな物語』をつなぐ方法：1975～99 年東ティモール紛争」牧紀男・山本博之編著『国際協力と防災―つくる・よりそう・きたえる』京都大学学術出版会、2015 年、125-152。

②<u>西芳実</u>「記憶のアーカイブ：スマトラ島沖津波の経験を世界へ」貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編著『記憶と忘却のアジア』青弓社、2015 年、44-65。

③<u>服部美奈</u>「20 世紀初頭のインドネシア・イスラーム社会における近代女子教育の形成 ：「正典」をめぐる解釈とコミュニティのゆらぎ・再編」『歴史学研究』2016 年１月、

No.940、13-23 頁。

④西芳実「離散・父権・魔物―インドネシア映画による災いの語り直し」『混成アジア映画 2017』2018 年、21-33。

〔学会発表〕（計９件）
①KEMEYAMA Eriko. “Reflecting aid with longer term perspective: Case study of disaster management project in post-tsunami Aceh, Indonesia." The 5th International Conference on Aceh an Indian Ocean Studies. 7 Nov. 2014, UIN Ar-Raniry, Banda Aceh.

②NISHI Yoshimi. “Recording their story: Personal memory and public lesson after the 2004 Tsunami in Aceh.” The 11th Kyoto-Aceh International Workshop. 24 Dec. 2014. Hermes Palace Hotel, Banda Aceh.

③KEMEYAMA Eriko. "Aid as entry activities in post-disaster societies: Two experiences in Aceh, Indonesia and East Timor", International Workshop "Toward Building Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia," 16 Dec. 2015. Kyoto.

④ NISHI Yoshimi. "Disaster Management Studies at CIAS, Kyoto University: ICT for Bridging Knowledge and Experiences." International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia, 2 Mar. 2016. Manila.

⑤NISHI Yoshimi. " Integrated Area Studies Approach to DDR: How to Contextualize Individual Experiences." International Conference-Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia, 21 Nov. 2016. Banda Aceh.

⑥西芳実「地域研究による研究連携を考える―「災害対応の地域研究」の現場から」地域研究コンソーシアム（JCAS)、京都大学、（口頭）JCAS 年次集会ワークショップ「地域研究の底力―現場から考える」、2016 年 11 月 6 日。

⑦西芳実「「災害対応の地域研究」から考える東南アジア」東南アジア学会研究大会（50 周年記念シンポジウム)、2016 年 12 月 4 日、慶應義塾大学。

⑧NISHI Yoshimi. “Natural Disaster as an Opportunity for Social Reform: A Case Study of Aceh” 5th International Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia. 2-3 May 2017. Kuala Lumpur.

⑨Nishi Yoshimi. "Information sharing and story-telling of disaster." 6th International Workshop on Toward Building a Regional Platform for Disaster Risk Reduction in Asia. 4-5 August 2017. Kyoto.

〔図書〕（計５件）
①貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編著『記憶と忘却のアジア』青弓社、2015 年。

②西芳実「災害の記憶：津波遺構に託される生存者の思い」牧紀男・山本博之編著『国際協力と防災―つくる・よりそう・きたえる』京都大学学術出版会、2015 年、153-158。

③西芳実・川喜田敦子編著『歴史としてのレジリエンス―戦争・独立・災害』京都大学学術出版会、2016 年、368 頁。

④西芳実「弔いの中に生きる―2004 年スマトラ島沖地震・津波被災地から」寺田匡宏編著『災厄からの立ち直り―高校生のための〈世界〉に耳を澄まさせる方法』あいり出版、2016 年、16-51。

⑤亀山恵理子「コーヒーがつくるつながり―東ティモールの紛争と社会の再生」寺田匡宏編著『災厄からの立ち直り―高校生のための〈世界〉に耳を澄まさせる方法』あいり出版、2016 年、52-83。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

西　芳実（NISHI, Yoshimi）
京都大学・東南アジア地域研究研究所・准教授
研究者番号：３０４３１７７９

(2)研究分担者

亀山　恵理子（KAMEYAMA, Eriko）
奈良県立大学・地域創造学部・准教授
研究者番号：５０５９８２０８

服部　美奈（HATTORI, Mina）
名古屋大学・教育発達化学研究科・教授
研究者番号：３０２９８４４２

(3)連携研究者

(4)研究協力者

（　　）